# 繁殖期におけるハチクマの行動様式

○植松永至[1,3]・堀田昌伸[2]・久野公啓[1,3]・佐伯元子[1,3]・植松晃岳[1,3]・篠原喜運[1]・中村浩志[4]
（1．信州猛禽調査グループ，2．長野県環境保全研究所，3．信州ワシタカ類渡り調査研究グループ，
4．信州大学教育学部生態学研究室）

ハチクマは、ハチ類の幼虫や成虫を主な食物とするタカであり、日本では、本州を中心に北海道から九州にかけて渡来、繁殖する夏鳥である。本種はまた、雌雄間だけでなく、個体間にも色彩の違いがあることがしられている。

演者らは、2001 年より合同で、長野県中部（安曇野）及び北部（長野）において、ハチクマの行動様式や環境利用に関する調査を行い、2005 年までに雄 9 個体、雌 3 個体（長野：4♂・1♀、安曇野：5♂・2♀）に発信器を装着して追跡調査を行ってきた。また、一部の個体については、育雛期に巣にビデオカメラを設置し、育雛行動や給餌内容に関する調査も行った。

本講演では、それら 12 個体のうち、2004 年に追跡調査を行った雄 6 個体、雌 1 個体（長野：4♂、安曇野：2♂・1♀）の調査結果を中心に報告する。

ハチクマは雌雄共に、渡来から抱卵期にかけて、特定の養蜂場に執着する傾向があり、追跡個体の行動圏は重なり合う傾向がみられた。養蜂場には追跡個体も含めて、複数の個体が同時に滞在することがあった。ハチクマは繁殖期を通じて同時に複数の個体を確認することがあったが、他個体を追い払うような排他的行動はほとんどみられなかった。

育雛期以降は、追跡個体が養蜂場へ訪れることはなくなった。また、抱卵期とは異なる場所を利用するようになった。

育雛期における行動圏内の利用は、日によって特定の場所を利用する傾向があった。営巣地と採餌場所との位置関係をみると、10km 以上離れた場所で捕った餌を運んでくることもあった。また、巣から離れた採餌場所でそのままねぐらをとることもあった。確認地点の環境は、森林域が中心であり、他の環境を利用することはほとんどなかった。

2004 年及び 2005 年の 2 年にわたって追跡した個体について、抱卵期での行動圏を比較したところ、安曇野の 1 個体（♀）は、2004 年と同様に、同じ養蜂場に執着する傾向がみられた。

ハチクマの生態については、選好する森林のタイプや構造、主食であるハチ類の採食方法等、未解明な部分が多く、今後も調査体制の充実をはかりながら継続していくと同時に、他の生息地においても同様な調査が行われることが望まれる。